第３回　鳥取市リノベーションまちづくり計画（仮称）検討委員会　議事概要

１　日　時　　平成２９年1月３１日（火）　１８：００～１９：３０

２　場　所　　鳥取市役所４階第２会議室

３　出席者

（１）出席者　　倉持委員長、赤山副委員長、桑野委員、池上委員、成清委員、
岡田委員、田中委員、楠委員、佐藤委員、金谷（竹本委員代理）、
委員出席１０名

（２）事務局　　市中心市街地整備課
中村課長、有元課補佐、川口主任、竹俣主任、田中主事

（３）オブザーバー　鳥取県　その他関係者

（４）一般傍聴者　　１０名

４　議　事

＜事務局より、計画（案）を説明＞

委員長（倉持）

計画についての意見もあると思うが、事務局の方から特に議論してほしいポイントとして挙げられている５ページの「リノベーションまちづくりで目指すまちのビジョン」について皆さんからご意見を伺えればと思う。

副委員長（赤山）

先に、確認しておきたいことがある。この前の嶋田さんの話で、いくつか嶋田さんの方で考えられ、提案された。「やりたい人！」などと言われて皆さん手を挙げていたが、いろいろな切り口があって、これだったらやりたいなとか、自分でもできるとか皆さん考えられたと思う。それが自分ごととしてまちを考えることなのかなと思う。でもどうやっていいかわからないとか、いくつかハードルがある中で、行政に関わることは行政の方で後押しするということがこの計画によって、そういう人たちに分かってもらえればいいと思っている。そういう意味からするとダイジェスト版が分かりやすくなっていてこれだったらやってみたいなという方が出てくるかもしれないなと思ったが、この計画がちょっと硬いのでそれとのギャップがあまりの大き過ぎるような気がする。事務局の説明にもあったよ

うに２本立てで基本的には計画は硬くなるということは言われたが、あまり関連があるようなないようなよくわからない状態になっている。果たしてそれでいいのかというところを皆さんどう思われるのか、最終的にこの２本立てで行くということで皆さんいいか。

委員（成清）
　しっかりした版（計画案）と軽い版（ダイジェスト版）とではまだすり合わせができていないと思って見ている。これは、今後すり合わせしていくのか。

事務局（田中）
　そうしていきたいと思っている。現段階ではまだ不十分である。

副委員長（赤山）
　そういう意味で同じようなキーワードがあるとか、「少しずつ、あかりを増やそう」などというそれが本編の方に入っていたら同じ計画だと思える。これからでしょうけど。

委員（成清）
　これまでの話の中で、しっかりした版と軽い版と二つをつくるということで共有したと思うが、軽い版を見たところで「私たち市民が」という下りが最後にあるが、これは誰目線なのか。市役所の方が市民でもあるのでこういう表現をされるのかなとも思ったが、誰目線なのかなということが確認したかった。

事務局
　一般の方目線。

委員（成清）
　しっかりした版を軽くしたものだったら、市が発信すべきものだと思うが。市の目線でそろえた方がいいのではないかなと。

委員（田中）
　言い回しの問題だと思う。

委員（成清）
　受け取る側のこともあるが、こっちは市が発信しているもので、こっちは民間の人が発信しているようなふうに読めたので、ちょっとどうなのかなと思った。

委員（田中）

その議論は、今じゃなくてもいいと思う。これはこれからすり合わしていくものなのだから、まずこっち（計画）を考えないとこっち（ダイジェスト版）は進まないと思う。

委員（成清）

赤山さんの最初の話を受けての話で、二つつくるというのは共有できていると思うので、じゃあ、どういうものをという中での質問。そこは、話しておいた方がいいのかなと思った。

副委員長（赤山）

基本的には今言ったように、計画があってのダイジェスト版なので、当然目線は同じになるのかなと思う。

委員長（倉持）

あまりこの話を長くやってしまうともったいない。目線の問題は、どういう目線がもっともいいかということを逆算して考えるとあるかもしれないなということで、その場合は必ずしもそろってなくてもいいかもしれない。どういうやり方があるかわからないが、そういう意味ではもう少し後の議論にさせてもらえればいいかもしれない。赤山さんが言われた二本立ての距離感みたいなものについては、最初に計画の方をつくりながらダイジェスト版をその次に議論する。優先順位としては計画の中身を決めて行くというような方向にしつつ、でも議題としては残しておくという形にしたいと思うがどうか。赤山さんが言われたことは、また後程ということでさせていただく。

５の「リノベーションまちづくりで目指すまちのビジョン」というところだが、市の方でたたき台を出してもらっている。この点について、リクエストとしてはもう少し民間目線にしてほしいということだが、無理に民間目線をひねり出さないといけない状況があればそれはそれでやる必要はないと思う。これで十分でないかという評価もあると思うので、こうしなければいけないというのは抜きにして、５ページを見ていただければと思う。どなたか意見はないか。感想でもいいが。

オブザーバー（鳥取家守舎_髙藤）

ひとつ気になるところがある。若い人が働く、遊ぶ、学ぶ、住む、チャレンジしやすいという話だと思ったが、自分の感覚では 10 代とか 20 代の人はどんどん外に出て行ってもらった方がいいなというふうに感じている。若い人とくくらずに 30 代、40 代、50 代むしろ 60 代ぐらいまでが、もちろん 70 代、80 代でもいいが、もうちょっと先輩の世代もチャレンジしてまちでどんどん楽しくやってもらえるようなまちになると、それは 10 代、20 代の人でいったん外に出て行った人が歳を重ねて 30 代､40 代になったときに帰って来やすい街になるんじゃないかなと思っている。そういう感じの方がいい。若い人にどんどんチ

ャレンジしてもらってというよりも、もうちょっと先輩世代と一緒になっていけるような。実際そういう世代の人はまちで何かやりたいというようなことはないんですかね、と感じました。

副委員長（赤山）

私もそれは思った。働くとか、遊ぶ、学ぶとか書いてあると、それができない人はだめなのという感じがあって。例えば福祉関係のこともリノベーションによって、福祉のことを発揮できるということもあるだろうし、子どもから年寄りまで、それもちょっと思った。

委員長（倉持）

15～30 歳世代というのは働くだけに限定しているのか。働くだけに限定しているのであれば制限的な、限定的なかたちはどうだろうと。

事務局

ターゲットを絞った方がいいのかなと思った。

委員長（倉持）

意図としてはよくわかる。

委員（田中）

出て行く年ごろだからということか。

委員長（倉持）

言ってみれば２ページの若者定住とか、そういうのと関連してということになってくる。

オブザーバー（鳥取家守舎_高藤）

無理がある。出て行くなというのは。

事務局

全市で転出傾向がある中で、そこをどう取り入れることができるかどうか、そこを目指すのかというところはあるとは思う。

オブザーバー（鳥取家守舎_本間）

確かに世代で区切るのは乱暴かもしれない、価値観もあるので。素案をつくるときに相談を受けたが、対象を広げたりすると最終的に暮らしやすいまちにしようとかぼんやりした話になるし、みんなが幸せに生きられるまちということになって、刺さらないというか、

またいつものやつかというような耳ざわりのいいものになりそうでどこまでフォーカスするかみたいなものがほしいなと。あまり絞り過ぎてしまうと「俺、関係ないわ」みたいなことになるし、みんなを包み込もうとすると届かないし。フォーカス感をお話ししてもらえたらと思う。

委員（田中）

今みたいに若い世代にフォーカスしたままにしたとして、何かしたいと思っている壮年というかお年のいった方は、それにも逆に触発されるというか、若者だけに任せていられないみたいな人じゃないとそういうエネルギーを持ってないと思うので、世代を限定したような表示になるが、そこを全然気にしないぐらいエネルギッシュな人はいくらでもやる気は出すと思うので、本間さんの言われていた、全体に柔らかくではなくとがった一点集中みたいな方が響きやすいのかなと思う。それで歳いってるから駄目だと思うような人は、そもそもこういうことに挑戦しないのではないかと思ったりもする。

オブザーバー（鳥取家守舎_本間）

必ずしも数字で、年齢で区切らなくてもやりたいことがある人とかうまい言葉あれば。

委員長（倉持）

これ解決策は、ある程度完成形のところまで詰めないといけないか。今のところ問題提起いただいて修正版が、また次回出てくるということか。

事務局

はい。

委員長（倉持）

言葉も考えちゃうと下を向いちゃうのでどんな言葉がいいかなというのはもう少し預けてもいいのではないかという気はしている。転出超過傾向のある年齢層でという硬い表現ではあるので気になるところではあったが。事務局におまかせしていいか、作文的なところもあると思う。#

他はどうか。

委員（成清）

まちのビジョンなので、「どのエリアを」というエリアを絞る話もこれまでしてきたと思うが、全体でいうとここの章にあるべきかなと思ったのと、もうちょっとそれぞれのテーマごとの具体的にどんなものをというものがあった方がいいのかなと思った。特に、遊、学の部分で「まちの空間資源を使い倒し」ということであれば、行政側として規制緩和と

いうこともあると思うので、それのどういったところをどういったやりかたでというところまであった方がいいと思う。

委員長（倉持）

具体例を入れるというイメージか。

「働く」のところとか、どんなイメージ？エリアを絞るというのはイメージしやすかったが。

委員（成清）

いろんなコンテンツをということ。公共空間であればどんな場所をどういうふうにという。いろんなコンテンツを受け入れるために川沿いとか、道路とか。

オブザーバー（鳥取県）

感想になるが、全体をみて３ページ目で課題ということで挙げてもらっているが、課題であげてもらっていることがリノベーションまちづくりをするための課題という風に見えていて、鳥取市がこのまちをどうしていきたいかという課題が見えてない気がしている。鳥取市がこのまちをどうしていきたいかという本質的な部分をきちんと挙げて、その課題を解決するためにどうしていくかというところが計画全体を貫くようなものになる気がして。その課題に対する解決策みたいなものが５番のところにくるのではないかと思う。

委員長（倉持）

市がどうしたいかという課題がまず明確でないということか。それはいろいろな次元での「こうしたい」があるような気がするが。

オブザーバー（鳥取県）

例えば若者に定住してもらいたいという一つの課題でもいいが、定住をしてもらうために「働く環境をつくりましょう」とか「遊ぶ場所をつくりましょう」とかというコンテンツが見えてくると思う。

事務局

最初に３ページのところは「リノベまちづくりの課題ではないか」ということで指摘されたが、そのつもりでここは書いた。経過とその課題はリノベまちづくりの課題という意味で書いた。５番のところで明確にさらに課題ということで入ってないが、中心市街地のエリア価値を高めるのが主な課題で、そのためには何だろうというところで、いちばん最後にも書いているが、なかなかいきなり居住というのは難しいのではないかという意見も委員会ではあった。交流人口を増やすのがやはり手っ取り早いということでエリア価値を

高めるそのためには人が集まるまち、人が出入りするまちがその下にさらに絞った課題としてあるのではないか。後はその下をどこまで絞り込むのかは考えないといけない。さっきも委員長の方から「どのレベルの課題を」というのはあったが、どこまでをイメージするかということだと思う。

オブザーバー（鳥取県）

このリノベーションまちづくり計画はたぶん何かを解決するための手段なのかなと思っていて、その解決したいことが明確に見えるとわかりやすい気がする。

委員（成清）

そのあたりの話は、４の（２）「計画の位置づけ」のところで、総合計画はいろんなことの課題が網羅的に書かれていると思うが、その中で何を担うかを示すことが佐々木さんが言われたようなリノベまちづくりで特にこれをしますよということにつながると思うが、この辺に書いたらいいのではないかと思う。

委員長（倉持）

たぶんここに書かれることはあまり具体的な課題ではなく、我々がこれまでよく聞いてきたような「人口が減ってますよ」とか「賑わいがないですよ」とかそういうことぐらい。総合計画、中心市街地活性化基本計画みたいな話になるのではないかという気がする。だから最初におっしゃったイメージとして、そういうほわほわした課題ではなくもっとズバッとした、具体的にこうしたいみたいなやつがあって、それに対して明確な「じゃあこうすればよくなるんじゃないか」みたいな対応関係が分かりやすい話があった方がいいのではないかというような意図じゃないかなと個人的には聞かせていただいた。でもこの市の計画は難しいところに陥っているが、こうやって計画をつくるとこの総合計画や中活計画の中に入れて行って、じゃあそこで課題って何っていうと総合計画でいっている課題であったり中活計画でいっている課題っていうのは無視できない要素であったりするので、この計画だけが独自の課題をポンと定めて明確化してとんがってしまうわけにもなかなかいかないだろうなと思う。その辺難しさだと思う。だから逆にそうじゃなくてもそういうのとは切り離してこれはこれでもっとガッツリと課題をとらえるべきだという意見もあろうかと思うが。

委員（桑野）

例えば５ページだがリノベーションという言葉を全部とっても全然通じる。まちが「働くところ」であり「住むところ」であり「学ぶところ」であり「憩うところ」、これはもう教科書に出て来るようなことなんで、全部とは言わないがほとんどリノベーションという言葉なしで鳥取市のまちづくりでもいけると思う。でも、ここであえてリノベーションで

かつリノベーションのまちづくりに係っていることを考えると、これまでの議論の中でも何度も出てきたが、例えば新しいお店を出す時にその近くには少し前に入ったお店もあるし、古くからやっているお店も似たようなお店もある。そことの連携を、間を取り持ってあげるのが例えば行政で、新しいお店が入ることによってその昔からやっているお店も活性化される。それが「まちのリノベーション」なんだと思うし、例えば「新しいお店を鳥取で始めた」、「鳥取でつくっているものを有効活用したい」、「土地に作っている農作物を使いたい」そういう時に間を取り持ってあげるっていうのがいろんな連携が生まれて、まち全体がリノベーションされていくというのであればリノベーションまちづくり、例えば「まちをリノベーションする」という意味になると思うが、今ここに入っているのはやっぱりあるお店がやりたい人その人だけがハッピーになってというのだったらやっぱりお店をリノベーションという狭い話になっているように思うし、逆にそれを大きい話に無理やり広げようとしているのでリノベーションという言葉そのものがなくても全部通じるような計画になっているように思う。リノベーションまちづくりでいくなら「まちのリノベーション」というかたちでのビジョンをここに書かれた方がこの計画の価値が上がると思う。

委員長（倉持）

そのあたりのご意見をいただきたい。「まちのリノベーション」というビジョン。例としてお店の連携みたいな話をしていただいたが。

委員（田中）

先ほど来ビジョンそのものがどうかという話もあると思うが、いちばん目指すところは不動産価値の低下を抑制して固定資産税の課税を大きくしたいということではないか。そうなると個々の物件一戸一戸をリノベーションしてどうこうというよりは、起爆剤的な物件が何かないとダメだと思う。まち全体、路線価だとかいうことも含めてまち全体、人が集う、あそこ行きたいよねとか価値をあげていくことでないと新規の不動産としての価値っていうのは単発よりは地域全体となるのと思うので、そういう意味でいくとやはりエリア、まちということになると思う。ただそれは、一気にまちということにはいかないと思うので、個々の遊休不動産をテコ入れしていくことがエリアに波及していくという意味で言うと、先生のおっしゃっていることもわかるが、個々にまずフォーカスしていかないと周りに波及しないのかなと思うし、逆に、まちが活性したからといって固定資産税が上げられるのかというのは実務的なところになる。上げられる方としては反発もあるなと思ったり。私が思うのは「なんで上げてんだよ」と、結構怒りますけどね。

委員長（倉持）

下がるからこそ出やすいという環境はあるのか。低いからこそ。実はそういう視点を言いはじめるときりがない。

連携とかエリアとかキーワードっぽくいくつか出てきているが。

委員（佐藤）

今固定資産税の抑制、抑えるというのは５番の頭にある「自主財源の減少を抑制し」という視点が入っているとそこに話が寄ってしまうような気がするが、今やろうとしていることはそこだけじゃないと思っている。例えば雇用の減少とか当たり前の地域課題としてあると思うが、そのために雇用をいかに中心市街地にフォーカスして小さな事業でいいので生み出していって、雇用を維持していくというのは持続可能性のあるような事業をひとつずつでも創っていくことを応援していこうという意味の「働く」という一つのキーワードなのかなと。今後このビジョンが、鳥取市がリノベーションまちづくりで「こんなコンテンツをつくる」とか「こんなジャンルの部分は規制緩和を含めて応援しますよ」という一個の立て付けになっていくと思うとあまり固定資産税、自主財源というのはフォーカスしない方がいいのかなと思う。先ほど桑野先生が言われたように「働く」にフォーカスしてもいいのではないかなとも思う。「住む」まで行くとかなりぼやけてしまうのでまず「働く」に順位的には力を入れてもいいのではないのかなと思う。

委員（田中）

居住人口はあると思うが、就労人口というのはデータがあるのか。

委員長（倉持）

昼間、夜間人口というのはどこでも取っているのでそれを見ればわかったりはする。また、事業所統計とかで追っかけることはできる。

事務局

事業所の数も従業員数はデータがあるし、経過もわかる。ちょっと古いがどちらも減少傾向で、対市のシェアも下がっている傾向はある。

委員（田中）

例えばそもそも鳥取出身、鳥取在住の人が２、３年でどっかに言ってします。転勤の人の入れ替わりを含めたら、もっと細分化してしまう。

委員長（倉持）

「リノベーションまちづくりの手法を用いて」というところがマジックワードみたいになっているというか、ここが上手に転換されている。ひょっとすると。リノベーションの手法を用いて民間プロジェクトを後押ししていくことがリノベーションまちづくりか。

委員（田中）
　そうなってくるとリノベーションまちづくりっていう手法が最も有効かどうかということがどうなんだろうということにつながってしまう。

委員長（倉持）
　リノベーションまちづくりっていうのがたぶん手法ではない。

委員（田中）
　「そのやり方がいちばんいい」、「マッチしている」ということか。

事務局
　ビジネスを生み出していって自走していけるということが、まちの課題解決につながっていっているというのが、これまでにない考え方だと思う。補助金を導入し続けてイベントがずっと成り立っているとかいうことではなくて、財政的にお金を投入するのではなくて持続するためのビジネスを生み出すことと課題解決をつなげる。そこに特徴があるからこそ取り組んだのだと思う。民間の方が稼がないと続かない。そことまちの課題解決がつながるようにできたらいい。

副委員長（赤山）
　リノベーションまちづくりの手法というのは、そのまえの２番目のリノベーションまちづくりとはということか。この考え方でそれぞれ注力していく、「働く」とかそういうことに対して考えていくということ。

委員長（倉持）
　だから、リノベーションまちづくりが、定めるか、目指す、プロジェクトのあり方みたいな。それを使ってというようなそういう感じではないか。そういうかたちでないと文章としてはおかしいのではないか。

副委員長（赤山）
　ベースにある嶋田さんの考えであるリノベーションまちづくりとはというそれぞれの今書かれた項目が５番目にビジョンとしてどうそれぞれに反映されるかということをもうちょっと詳しく具体的にやらないとダメ。リノベーションという言葉がなくても成立するという話になってくるのではないだろうか。
　ちょっと気になるのがリノベーションまちづくりとは２番目の中で、「行政はそれを補助金でない形で後押しする」、５番目にも「補助金などをベースにしたまちづくりから」って書いてあるが、もうちょっと説明が必要かなと、なんで補助金ではないかたちなのか。で

その補助金ではないかたちでやるということが、それぞれ「働く」とか「遊ぶ」、「学ぶ」とかそういうことに対して補助金なしでやるにはどうすればいいかというのをもうちょっと具体的に示す方がいいかなと思う。

事務局

よく言われる趣旨としては事業をしっかり考えようということだと思う。安易に最初にお金がある状態で、事業性が伴わない状況で物件を改修してしまって結局うまくいかないという状態がある中での、もうちょっとしっかり事業として考えようという意味での「補助金を安易に使ったらいけません」という趣旨だと思う。

オブザーバー（鳥取家守舎_高藤）

たとえばその「働く」のところだと今でも創業支援補助金みたいなものがあるが、それが「学ぶ」とか「遊ぶ」になると補助金ではないバックアップのし方はどういうかたちになるのかなと、ちょっと想像がつきにくいなという気がした。

委員（田中）

後押しするということだと規制緩和とか何か申請をスムーズに通りやすくするとかそういうこともあったりするのか。考えられる例えば道路占用許可を今まで３段階をワンステップでできますよとか具体例みたいなもの、可能になるであろう具体例みたいなものを入れていただくと、道路占用とかで歩行者天国とかそういうことが可能なんだなというイメージにつながりやすいかなと思う。衛生上の保健所的な野外での飲食云々とか具体的に。やりだしてみないとわかんない感じ？

事務局

法の番人でないと一方ではいけない中で、なるべくやりやすいように協力していきたが、安易に緩めてはならないところからなかなか具体例を明記するのは難しいところがある。県がシェアハウスを運用しやすくするような条例を確か昨年つくられた。そういったイメージかなと思う。ちょっとまたどこまでができるのかわからない。

委員（田中）

具体的に書けないにしても何かあるか。構想というか。

事務局

現段階ではない。

委員（田中）

結局後押しすると言って何もしてくれないということになってはまずいので、何か聞かれたときに出せるネタでもあった方がいいのかなと思ったが。

委員長（倉持）

それはさっき成清委員が言われたエリアを絞った方が分かりやすいと同じ、そういう話かなと思って聞いているが、そうすると３ページの上にある「リノベーションまちづくりとはのこれに対応するようなものが５番でそれぞれ具体に書かれると鳥取市が目指すリノベーションまちづくりになるんじゃないかなって気がしなくもないが。例えば、新しい使い方をしてまちを変えていくってじゃあ鳥取では何をどう変えるビジョンなの？とか、組み合わせて使い尽くすってどういうことっていう、鳥取の固有の問題なり課題とこれがセットになって「鳥取市リノベーションまちづくりで目指すまちのビジョン」、「鳥取市のリノベーションまちづくり」みたいなものが定義されるのではないかなと単純に思ったが。

委員（田中）

なにか売りがほしい。

委員長（倉持）

「リノベーションまちづくり」とはってここ２番に出ていることである意味縛りがあるというか、「リノベーションまちづくり」が囲まれているのでこれをある程度尊重していくのであれば、ここを逆に使ったほうがやりやすい、わかりやすくなるような気がするが。

委員代理（金谷）

リノベーションスクールのこととかをネットで見たりしているときに、そこの物件を使う時にそこの地域のことを調べる。ここの課題がこうでここにはこういうものがあったらいいだろうなということを調べて、そこを活性化するとかそれを生かす使い方という点でいくと、鳥取市ってするとニーズが違うと思う。駅前の辺のニーズであるとか市役所の周りのニーズであったりとか違ってくると思うが、さっき言われた連携というところとかを考えると、ここをうまく活用してそこのニーズをあわせてそれを使ってほしいわけであって、そこを生かしながら今まであるその地域の人とうまく連携していってそこに人が集ってきたりとかそこで働けたりとかそこで楽しめたりとか。私は高齢者が専門だが、例えばなんで商店街が廃っていくのかなと考えた時にそこまで出る足が面倒くさかったりとかそこに行っても人がいなかったりとかいろんな課題があると思うが、県外の事例を見た時にそこにある場所に憩いの集う場所があってそこに行ったら家で一人で食べれるのだけど、そこには食べ物を売っているところがあって、パン屋さんがあったり、ちょっと交流スペースがあったりとかそこで人に出会えたりとか自然に集まってくる、そういうことを目的としたまちづくり。そこの地域を巻き込んだ地域づくりにした方がいいと思うので、挙げ

る４つの要素というところはあくまでもそこの地域づくりをした中で働けたり、遊べたり、体験できたりっていう２番目にくるのかなとそんな気がした。

リノベーションまちづくりの手法を生かすということはやはりそこのニーズを知って、そこの課題を知って、ここを活性化していく。それが働く場所をつくることだけの目的ではないだろうし、集まる場所でもあるかもしれないし、そこの中で住みたい。さっき言われたように、住みやすい鳥取市になるには欠かせないことだが、リノベーションである必要はないかもしれないのでリノベーションとするとしたらその中で…。

委員（田中）

既存の不動産を生かすというのがあるが、極端かもしれないがここは依然、何とかの産業のとおりだったみたいな歴史がある、そういうのに特化した通りづくりみたいなものも面白い気がした。魚屋街とか生地街とか洋品店街とかその既存にあるものはそういう歴史を刻んできている建物が多いと思うのでそういうエリア分けみたいなものも面白いかなとも今の話を聞いていて思った。

委員長（倉持）

今のは３ページの２番の話だと思う。全体的な地域の資源とか遊休不動産という空間資源とかこれを取り巻く課題を見てビジネスにしないといけない。課題があるからビジネスがあるという話もあるから。今みたいな話はやっぱり採用させてちょっとまとめるとうまくいきそうな。

みなさん、別の切り口とか。そうでないとか。

委員（佐藤）

まとめにくくしてしまう話かもしれないが。

ご質問の方にもあったかと思うが、地域課題を解決するためにリノベーションまちづくりはビジネスを創るということ。新しいコンテンツを生み出すための民間プロジェクトを後押しすると言っている以上、やはりビジネスをいかにつくるかということだと思うが、ビジネスで解決する地域課題がまだぼやっとしているがために話がまとまりにくいのかなと。さっき「働く」にフォーカスしてといったが、「働く」にフォーカスでなくてプロジェクトがビジネスになる、イコール働くになると思ったが、例えばそれが住みたい人が入りやすいまちになるためのビジネスを後押ししていくのであればそれはそれでよしだと思うし、学ぶものを生み出すようなビジネス、プロジェクトということであればそれもいいとは思うが、そうなるとかなり広範になってくるので、どういう課題を解決するためにというところのもう少し深堀りがないといけなかったのかなと。いまさら言ってしまうと元に戻ってしまうが。というのがまとめづらくしているような気がする。

委員（田中）

今さらながら聞きたい、「働く」、「遊ぶ」、「学ぶ」、「住む」ってあるが、「買う」っていうキーワードがいるのではないかと思って。まちで何をするかっていうと買物することも必要だと思う。「働く」と近いかもしれないが何か売る人の目線でいくと「働く」だが、買いに行く人からすると「働く」ではないので、何かショップができて買う人がなければこの事業は成立しないので、「買う」っていう要素も、旅行だとか観光も「買う」っていう要素が目的の人もいる。買い物に出かけるというごく当たり前のことがまちなかでなくなりつつあるということも掘り起こすことが必要なのかなと思った。買い物できないと住めないというか。

委員（成清）

エリアの中にどんな業態がいるのかということになるのか。「買う」にしてもどんなものとか。

委員（田中）

「業態がいるのか」というか、何か買うお店がないからそこに行かない。商売でいうとそこに店がないから俺が店を出そうと。そしたらそれができて買いに行く人も来るということ。「働く」と「買う」という切っても切れない二つが組み合わされないと成立しないのかなと。秤を買いにいこうと、そういう意味でもとても地域に根ざしているのかなという感じです。

委員長（倉持）

先ほどのビジネスをいかにつくるかという話と既存の創業支援との線引きはどういう風に考えたらいいのか。

委員（佐藤）

そこの線引きをするのがこのビジョンになるのかなと思っている。創業支援だったら今まで「何でも支援しましょう」、鳥取市内で始めることを「どんな状態であっても始めることを支援しましょう」というのが起業支援だと思うが、鳥取市でくくるとかなり広いが、鳥取市の課題をまちなかでリノベーションまちづくりの手法を使って支援する対象ってなんだろうというところがここに落ちているべきでないかなと思った。そうしないとどんな分野に対しても規制緩和をするとかどんな分野に対しても制度融資をつけるとかという話になると思う。

委員長（倉持）

そうなると逆に手厚くある支援を遠ざけてしまう可能性もある。

委員（佐藤）
　そう思う。ただ、言葉として適切かどうかわからないが嫌われる対象を決めるということがないとよりとがった規制緩和の支援というのができるようにならないのかなと思うので。中心市街地の中でこんなふうなまちにしたいっていうものの定義づけがあってそこに課題を解決できるようなものに対してはより手厚く支援をしていくんですよというふうにしてあげることが今回これを作るのであれば。

委員長（倉持）
　その手厚い支援はほかでもいろいろお金を回してやっているので今まで以上に手厚い支援というのも解釈の次元になっちゃって、高い理念だからこの支援で十分だみたいななんかそういう話になっちゃってなかなか実害に勝てなかったりするとどうなっちゃうんだろうと考えたりするが。

委員（佐藤）
　その他の事業者に対する補助金をやめるわけではないので罰金みたいなものが当然あると思う。

委員長（倉持）
　僕もそもそも立ち返っちゃまずいと思いながら、補助金をベースにしたまちづくりから稼ぐことによるというところを強調しているが、そもそも補助金をベースにしているかなという気もしなくない。鳥取のまちづくり自体が。果たしてそんなに補助金じゃぶじゃぶにして補助金でぐるぐる回っている組織なり会社なりがすごくたくさんあるのだろうかと言われるとそうでもないような気がする。せいぜいイベントが補助金漬けだったりするのはわかったりはしているが、それも額としてまちの発展なりをスポイルしているかってそこまでいうと検証してみないとわからないと思うが。そうなった時になんか鳥取ってそういう意味では非常に手厚いいろんなまちづくりだけじゃなくて産業だったりなんだったり、手厚い政策をどんとやっているので、その辺も踏まえるとあまり補助金をベースにしたというところから、実態を踏まえて補助金をベースにしたところを強調し過ぎない方が、リノベーションまちづくりが結果的にやりやすくなるのではないかなという気がするが。そこが個人的に感じている難しいポイントだなと思う。
　あと４分ほどだが、せっかくなので発言して帰っていただければと思う。

委員（楠）
　あの手、この手とか手作りをやっている人をいっぱい知っていて、そういう人たちはやっぱり自分の店を持ってなくって週末にイベントで出すとか、そういう人たちがいっぱい

いて、大きなお店で今はインターネットでも物とか買える時代で、でもそういうイベントはすごい人が集まる。なんでかというとそこにしかないものが売ってあるっていう。そういう人たちを見つけ出して、こういうまちをどんどんつくっていったら面白くなると思う。

店があってもインターネットでどんどん入っちゃうんで旅して買ってきたものを売るとかそこら辺にない「そんな物あるんだ」みたいな、そういう店とかあった方が面白いかなと。

委員長（倉持）

やっぱりおもしろいとか楽しいとかそんな感じなのかな。自主財源の減少を抑制しとかそういうのとは離した方が。

委員（池上）

今議論をした中で、「住む」というのにはあまりフォーカスされていなかったと思うが、私はこの中で「住む」っていうのを押したい。中心市街地のまちに駅前とかに住みたいという人がいてその人たちがそこに点々と住む環境が整ったところに入ったりするとその人たちはそのエリアが好きで来ている人だと思う。そういう人たちが入ることで、またその人たちがそこを盛り上げようといろいろすると思うので、そういう人たちはまちに住むので車がなかったりとかそういう人たちもたくさんいると思うが、そういう人達はまちでいかに住むか、楽しむかっていうのを重点的に考えると思うので住む人たちをもっと入れた方がその人たちが勝手になんかまたいろいろこう起点をつくっていくのではないかなというのはあって。もちろん「働く」というのは大事だが、「住む」をやるとその人たちが例えば空いているところを見つけて働くとか何かを始めるとかっていうことに結びつくんじゃないかなと思っているので、そこに入りやすいまちと言えばざっくりしているが、うまく引っかかるようなやり方とかにするといいのかなと。あと県外に出ている人とか３０代とかになって帰ってきたいとかそういう人たちが多いのでそういう人たちが、一階でお店をして二階で住むとかいう人たちがたくさん来るとまちがもっと面白いのかなと思うので私は「住む」をフォーカスした方がいいと思う。

委員長（倉持）

たとえばどのあたりのまちが、具体的に地名で言うと。

委員（池上）

そこまで考えてなかったが、そこに住みたいと思う人は何かしらでそこが好きで住むと思うので、そういう人たちがいろんな意味で集まると面白いのかなと。そこがつながったら面白いのかなと思う。

末広の辺は飲み屋街ではあるが、あの辺で住む人が増えたら面白いんじゃないかなと。

ざっくりですけど。昼間が死んでいるので、そういうところに住む人いるとちょっと変わるのかなと思う。

委員（田中）
　わりと中心市街地みたいなところに住んでいるので気に入っている。あの辺の住み方が。

委員長（倉持）
　イメージでこの辺がこうなったらいいなというのをもうちょっと書いてもいいのではないかなと。エリアの話。

委員（岡田）
　あまり最初の会議と変わっていない。最初の討論をこのまま続けるのではなく、実行に移した方がいいと思う。何かものを決めて何かつくってみたらと思うが。

副委員長（赤山）
　それはこの計画があっての次の段階。まず、計画の具体的なものが出てきたので、これからそれをどう実現に向けてやっていくかというのを今討論している。

委員（岡田）
　もう行動した方が早いのじゃないかなと。何か用意していただいて、何か作って行った方が面白いのじゃないかと思う。

委員長（倉持）
　どっちかというとそっちが進んじゃってこっちがちょっと遅れを取っている感じがしなくはない。

副委員長（赤山）
　個々がばらばらに勝手にやっていくのではなくて統一した考えのもとにやっていきましょうということ。
　ダイジェスト版のことでひとつ。デザインも文章もすごくいいが、ちょっと気になったのが「「もったいないから使おうよ。」リノベーションはそういうシンプルな考え方です」とあるが、もったいないから使うだけでなく、リノベーションってすごく古い建物がすごく魅力のある建物とか、かっこいい建物とかある。これ使えたらいいなとか、これ使ってみたいなとかそういう思わせるものとかがあって、それが自分できなくて、誰かがそれをリノベーションしてやるよということだったらそれに何らかのかたちでかかわりたい、どんどん仲間が増えて行くというかわくわく感とか楽しさというか。これからまた具体的に

されていくと思うが、そういうのが感じられるようなものになればなと思った。

委員長（倉持）

冒頭に赤山さんに言われたダイジェスト版と計画との問題まで到底到達できないところまで話がいったような気がするが、時間なので事務局に返したいと思う。

事務局

計画案を２月中旬にはパブコメに出していかないといけないという日程的な制限もあって、もう１回委員会を近日中に開催したいと考えている。その間に今日議論いただいたことを反映して作れるところまで作ろうかと思う。

長時間にわたりご議論をいただいた。議論をもとに事務局にて計画案修正して次の委員会でも提示させていただく。本日はこれにて終了する。